

大祓式

十二月三十一日 午後四時齋行

大祓式は平安時代に大宝律令に記され、今に至るまで連続と受け継がれてきた日本最古の公の神事です。一年を半期に分け、六月二十日を「夏越しの大祓」、十二月三十一日を「年越しの大祓」とし、日本全国の神社で同日に齋行されます。

大祓式では、「罪穢れを祓い清める」と言いますが、普段の生活の中で、人が知らず知らずのうちに犯した過ちや、または不意の病気や怪我などの不幸を祓い清め、明日からの生活を明るく元気に過ごせるよう神様にお祈りする神事であり、同時に、広く地域や社会を祓い清めて次の半期の息災を祈ります。半年を過ごし心身ともに弱くなった状態を、手水舎にて手水を取って体の内側外側のお浄めをし、大祓式にて、大麻での祓え、大祓詞の奏上、形代での祓え、切幣での祓え、と幾度もお祓いをするにより、穢れ（気枯れ）た状態から、気を良める（清まった）本来の活力に溢れた元気な状態にして、お一人お一人が清々しいお気持ちで明るく元気に来る新年を過ごせるようお祈りをし、世の中が平安で心豊かに過ごすことができますよう、この社会全体を祓い清め、祈りを捧げます。

「罪穢れ」というのは、「罪」と「気枯れ」を指し、心身を含めた様々な物事が正常（清浄）から外れ、生命力が枯れ弱くなった状態を表す言葉です。その対語にあたるのが「禊祓」です。「禊」とは、穢れを除去するため、「祓」とは、罪を解除するために行われるお清め儀式です。

人は気が枯れている時に間違いや罪を犯すと考えられ、常日頃から穢れを近づけないよう清く明るく正しく素直に生きることを心がけ、この半年に一度大祓を受け、不意についた穢れや、知らず知らずのうちにいついてしまった罪穢れを解除していくことが正道とされてきました。祓を受けた後、それぞれが半期を振り返り、ひとつひとつを思い返し、慎み

の心、慈しみの心をもって改善をしていくことを互に行い、許しあうことで罪穢れの贖いが成され、初めてより良い明日を形作る儀式となるのです。この機会に、心ひとつに手を合わせ、感謝と慎みの祈りをお届けください。

・形代について

形代は罪や穢れを祓い清めるためのお祓いの道具であります。紙製で人の形を模して作られ、自分の体を撫でて身体についた罪や穢れを遷す「依り代」として用いられます。祓い方は、形代に氏名と生年月日をご記入いただき、頭の前から足の先まで、身体の外側から内側を「形代」で撫でて体の外側の罪穢れを遷し、最後に三度息を吹きかけることで身体の内も清らかな状態になります。

お祓いが終わりましたら、十二月三十日まで付属の封筒に住所氏名を記入し、初穂料を添えて神社までお持ちください。

当社の「大祓式」は、午後四時より本殿前で神職とともに「大祓詞」を唱え、人の形をした「形代」に罪穢れを遷して、心身を祓い清めます。どなたでも参加できますので、ご家族皆さまお揃いでご参列ください。

ご参列が難しい方は社報についております「形代」を用い、左記の方法でお祓いの所作を行った後に、初穂料を添えて当宮へお納めください。「大祓式」当日祭壇にお供えし、一緒にお祓い申し上げます。

形代での祓い方



1. 「形代」にお名前と年齢を記入します。



2. 頭の前から足の先までの、あらゆる部分を「形代」で撫でて、身体の外にある罪穢れを遷します。



3. 最後に、「形代」に大きく息を三回吹きかけ、身体の内にある罪穢れを遷します。